慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	斯道文庫蔵「白梼山春利雑集」目録と解題
Sub Title	Catalogue and bibliographical notes on Kashiyama Harutoshi zasshu held by the Keio Institute of Oriental Classics (Shidō bunko)
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2026
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.60 (2025.) ,p.211- 245
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20250000-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵「白椿山春利雑集」目録と解題

一戸渉

はじめに

本稿は、斯道文庫に近時収蔵された信濃国佐久の幕末明治期の国学者である白椿山春利（一八一六～一八八一）の旧蔵書類全七十三点の目録および解題である。斯道文庫ではこれらを「白椿山春利雑集」（以下、本雑集と呼ぶ）と題した一つの叢書として整理している（叢書全体の請求記号はB1トト31894）。「白椿」は難読だが、これは『古事記』に「畝火之白椿原宮」（神武天皇条）や「於吉野之白椿上、作横臼而」（応神天皇条）などと「白椿」を「かし」と訓じる例があることに基づく。本雑集の特色のひとつに、本居宣長（一七三〇～一八〇一）とその門流である鈴門関係の稀覯資料がいくつか含まれている点が挙げられる。春利が『古事記』に拠ってもとの姓である「樫山」を改め、自らの姓を「白椿山」と表記したのも、やはり『古事記伝』の著者たる宣長への敬慕ゆえであろう。春利は宣長関係の資料を積極的に収集していた形跡があり、後述するように、それらの資料のいくつかに見える春利の識語類には、宣長学への憧れが率直に綴られている。

他方で、本雑集には平田篤胤関係の資料も含まれており、また篤胤が国学者として活動を開始して間もない時期に接点があった岡庭真垣の著作である『百人一首波羅能黄葉葉』などの稀

覿本も少なくない。また、春利と交流のあった人々の資料も複数認められ、小諸藩士の太田道興による『源氏物語』俗語訳であり、宣長「物のあはれを知る」説を独自に変容させた著作『源氏物語二葉艸』といった新出資料も多数含まれている。幕末明治期における信州での国学受容や地方歌壇の実態を捉える上でも、本雑集はさまざまに活用されうる資料群だということができる。以下に紹介を試みるゆえんである。

解題

○旧蔵者白梼山春利について

本雑集の旧蔵者である白梼山春利に関しては、大正十一年（一九二二）に刊行された佐藤寅太郎編『信濃人物志』に見える以下の記事が最もまとまったもののようである。

> 橿山春利は、通称亀四郎、佐久郡小諸町の商、伝兵衛敬当の子なり。古事記、橿を白梼に作るを以て、白梼山に改記す。春利、幼より穎悟、稍長ずるに及び、伊勢の人衣川長秋、小諸の人小林松蔭、館林の人生田秀国等に就て、和歌国典を修め、又、秋田藩士加藤景琴、伊豫の人師岡正胤、松代藩士山寺常山、岩村田の人角田忠行、上田の人成沢寛経等と交りて、大に得る所あり。旁、好みて経史を読み、書法を研究せり。維新の際、長藩士宍戸半蔵の知る所となり、松岡巡察使の部下に属し、倉島勇之助等と、力を国事に尽す。藩主之を賞せり。明治十四年十一月病歿す。年六十六。著はす所、衣服考、八十廼隈手、源氏物語々解、社宮寺名考、及、随筆歌集等若干巻あり、家に蔵す。就中、衣服考は考証明確、大に見るべきものありと云ふ。春利、秀歌多し。其寄国祝に曰く、
>
> 動かじな、天津日嗣の、宮ばしら、太しくゐます、大和島根は。（色部城南撰文伝[1]）

春利は小諸の商家であり、鳩屋を屋号とする樫山家の本家伝兵衛家の子として文化十三年（一八一六）に生まれている。後にも述べるように「白梼山」姓の人物は明治期の小諸に複数確認できるが、その表記の特殊性に鑑みて、この春利の代に分家して「白梼山」姓を名乗るようになったと考えて間違いない。春

利が「白椿山」との表記で自身の姓を記している最早期の例は、いまのところ雑集中の『歌合抄出』（B13183-6 ト1）における以下の弘化三年（一八四六）識語のようである（引用に際して句読点を補う、以下同じ）。

おくれたる世に故鈴の屋ノ大人をしぬひまつる心には、此ノ書をひらき見るをり〳〵、大人のおなし世にうまれあひて歌のことうけたまはるこゝちせられて、うれしともうれしうなん。この巻はをしへ子たちの歌の判をさせ給へる中に、後見んひとの心得にもなりぬへきふし〳〵をえりいてゝ、かいつめおかれたるなるへし。そのあひた、四とせはかりのほとゝそおしはからるゝかし。おのれ、さきに伴ノ信友ノ翁のとりあつめものせられたるを得てうつしもてるに、あはせて五巻とはなしぬ。さて此巻をはしめの巻とする事は、この歌合そ、もともはやかりけむとおもゆればなり。

弘化三年三月　白椿山春利

ただし、該書にも「鳩巣堂樫山氏蔵書記」との蔵書印が捺されているほか、「樫山蔵書」との印も複数の資料に見えることから、「白椿山」という表記は、恐らくこの時点では春利が一種の雅称としてごく私的に用いたものであったとみてよいだろう。

さて、『しぬびごと』（B13183-68 ト1）は春利が幕末から明治初頭までに認めた宣命書の追悼文集だが、そこに文久二年（一八六二）四月十一日に七十八歳で亡くなった春利の父敬当の追悼文が収められている。それによれば、春利はいまわの際の父から「本末の二家、子孫の八十続幸く真幸く栄往べく、みまし事執れ、此家勿離曾と令せ賜ふ」と語られたとしており、すでにこの時点で春利は本家から独立して別家を立てていたことになる。同書に収められた慶應二年（一八六六）五月十四日に四十四歳で亡くなった妻文子（佐久郡今岡村の齋藤安元女）の追悼文には「己れ春利に嫁て、分立し我家の、万機総以て、怠事無く、緩事無く」云々とあって、別家を立てた春利のもとにこの文子が嫁いだことが判明するが、さらに「己れ春利、歌よむ事も、書籍見事も、全みまの文子刀自の、弥務に弥結に、あなひ補佐たるに、因なも在ける」、また「年頃、はぐくみ立賜へる教子等諸、生母の如く念成て」などともあるので、春利は小諸の地において、国学の私塾を開き、そこでの門弟への指導

や教授を生業としていたらしい[3]。

ところで、『破戒』や『夜明け前』などの作品で知られる文学者島崎藤村が国語及び英語教師として教鞭を執っていたことでも知られる私塾の小諸義塾が開学していたのは、明治二十六年（一八九三）から明治三十九年までだが、同塾の「門弟名簿」に「白椿山利貞」、「栃木県小山町　日本無線社宅　旧小山　白椿山粂次郎」との名が見える[4]。なお、白椿山いそじの父虎治は藤村の借家の大家で、藤村「千曲川のスケッチ」の登場人物「I」は白椿山いそじを指すとされる[5]。先にも引いた春利の妻文子の追悼文中に「我奈妹命（アガナニモ）、早より、嗣子定（よつぎのさだめ）でむ事をし、数多（あまた）の遍重（たびかさね）て、諫（いさめ）たりける物を、已れ春利が怠惰（おこたり）に、其事不竟」とあり、春利には実子はなかった模様なので、この虎治は養子であろう。明治二十五年時点での小諸の商家一覧に「小間物商」として、「洋物商／仝（小諸町・引用者注）（山に「片」字の屋号）鳩屋　白椿屋（ママ）虎治」と見えることを言い添えておく[6]。先述した通り、春利は維新以前から雅称として「白椿山」という表記を用いていたと目されるが、維新後に明治政府によって戸籍整備が進められてゆく中で、春利はその「白椿山」を自家の苗字として届け出たものと推察される。

以下、春利の交友関係や諸活動について、事実関係をいくつか整理しておく。まず、先に引用した『信濃人物志』は、春利の国学の師のひとりとして宣長および春庭門で、鳥取藩に国学師範として招かれた衣川長秋の名を挙げるが、長秋が没した文政五年（一八二二）の時点で春利はわずか七歳であり、これは誤伝であろう。また同じく国学の師として挙げられる「生田秀国」は生田国秀、すなわち篤胤門の生田万（一八〇一～一八三七）のことで、雑集中にも生田万の著作『〔古学二千文訓〕』の写本（B1トト318-381）などが見えるが、実際に両者に接点があったかは現時点では未詳である。ただ、この『古学二千文』の刊本に序を寄せている秋田藩士の賀藤景琴（一七九二～一八六七）が、嘉永二年（一八四九）に江戸から秋田への帰路を綴った道中記である『北帰録』の九月一日条に、春利が登場している[7]。この日、善光寺駅の栢屋定吉宅の旅店に宿っていた景琴は、たまたま同宿していた「小諸城下の本町、鳩屋伝兵衛の一子、亀四郎なる者〈名乗りを春利と云〉」から面会を求められている。荷札から秋田藩士であることを知り、ぜひ平田篤胤のことを聞きたいとのことで、「鰍生、平田先生に御一面申したる事なけれ

ども、深く御学風を慕ひ、先生の著書など大概一覧したる由にて、処々暗誦するに、記憶の慥かなる事、－勝れたる壮年〈三十四歳〉の者なり」と春利を評している。春利に対して、篤胤の母は自身の祖母の姉で、縁戚関係にあることなどを伝え、また春利から聞いた話題のいくつかを箇条書きで記しているが、その詳細については後に改めて触れたい。先掲の『信濃人物志』の記事にも春利と景琴とが交流があったとの記載があったが、この『北帰録』の記事はそれを裏付けるものである。

ところで、明治初年頃の信州における平田派国学者の名簿である『御国学有志姓名録』に「仝（小諸・引用者注）　鳩屋亀四郎」、と春利が記載されているが[8]、『誓詞帳』をはじめとする門人録中には春利の名は見えず、平田家に正式に入門したわけではないようである[9]。また、弘化二年（一八四五）七月末に春利が阿弥陀山清水寺（現長野市若穂保科）を訪ね、同寺の所蔵する古製の鍬型について模写を描き、細部について記録した文章が残る[10]。この鍬形は松平定信編『集古十種』兵器甲冑四に「信濃国高井郡保科村清水寺八将権現社蔵鍬形図」と題して載るもので、この時期の国学者の行動としてはさして珍しいものではないが、春利の古物への関心も看取される。

○本居宣長及び鈴門関係資料について

以下では、本雑集に含まれる宣長及びその門流である鈴門関係資料について、その概要を紹介する。

『鈴の屋翁答元克問書写』（B1ト318-14 1）は、甲斐の国学者萩原元克（一七四九～一八〇五）が師である宣長に送った問いと、宣長側からの答えとを整理したものである。筑摩書房版『本居宣長全集』別巻二に萩原元克自筆本を大正二年謄写した旨の奥書を有する山梨県立図書館甲州文庫蔵『萩原元克本居宣長問答録』を底本とする翻字が備わり、部分的に重複するが、新出の記事も少なくない。本書については、「萩原元克問・本居宣長答『鈴の屋翁答元克問書写』翻印と解題」と題して全文の翻字を本輯に別途掲げたので、詳細についてはそちらを参照されたい。

『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写』（B1ト318-24 1）、**『〔本居宣長添削〕萩原元克和歌詠草集』**（B1ト318-28 2）、**『鈴屋翁加筆萩原元克詠草写』**（B1ト318-25 1）、**『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写 次』**（B1ト318-26 1）の四点は、いずれも宣長が添削を加えた萩原元克の歌文を白椿山春

利が書写したものだが、元克の歌文の多くには評語が朱筆で書き添えられている。それらは一見すると宣長が加えた評のように思われるのだが、そうではない。その間の事情は春利による以下の序文で語られている。

すくれたる人のなせるあとは、かりそめなるも世に残りてめてたきものになん。故鈴ノ屋ノ大人、をしへ子萩原ノ元克ぬしのうたにふみに筆くはへたまへるかあるを見るに、かゝることはしかいふへかりけり。しかる所はかくいふへくこそとこゝろえられて、おのれらかためにめてたきものにしあれば、こゝかしこにちりはふれたるをとりあつめてさうしにとりたてゝ二タ巻として、鈴ノ屋ノ判番歌の次キ巻とするにつきて、くはへたまへる筆のあとにそのこゝろをさしくみて、丹(ニ)もておしはかり、ことかきくはへつるは中々なるものそこなひこそおほからめ。見ん人とかめたゝしてまことのむねの世にのこらましかは、よろつ代にめてたきものにあふかさらめや、しぬはさらめや。かくいふは嘉水六とせといふとしのやよひ白梅山ノ春利

引用は『〔本居宣長添削萩原元克和歌詠草集〕』（B1ト318-28 2）に拠ったが、『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写』（B1ト318-24 1）にもほぼ同文の序文を存する。「くはへたまへる筆のあとにそのこゝろをさしくみて」とある通り、本書に見える評語は、宣長が施した添削から推し量って、春利らが添削理由を評語の形で補記したものなのである。近世期の歌文の添削において、同趣の事例はにわかには思い浮かばないが、いずれにしても春利らの宣長への敬慕の情の篤さのあらわれとはいえるだろう。なお、右の序文中の「鈴ノ屋ノ判番歌」とは後述する『鈴屋判番歌』（B1ト318-5 1）のことである。

これら四点の資料の関係だが、『〔本居宣長添削萩原元克和歌詠草集〕』は分量が最も多いことから最終的な形態の稿本と考えてよく、『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写』はその前段階の稿本と見なすことができる。残りの二点は、さらに前の段階の稿本であろう。『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写 次』には表紙に「原昌言蔵」とあって、信濃国塩尻の庄屋を務めた好古家にして国学者の原昌言(11)が所持していたものの写しである。同種の注記は『鈴屋翁加筆萩原元克詠草写』に「以上吉祥院蔵」とあり、また先に触れた『鈴の屋翁批評萩原元克詠草写』にも「右太田道

興君蔵」「所蔵（春利所蔵との意か・引用者注）」「右紙屋藤兵衛蔵」「右大竹氏蔵」「右臼田村桜叟蔵」「春利所蔵」「右依田見節蔵」「右斎藤曾右衛門蔵」「右松井庵蔵」という注記が見える。このうち「吉祥院」は春利と共に歌会に参加している小諸の修験者であった山田弁道のこと[12]、太田道興は小諸藩士、「紙屋藤兵衛」「斎藤曾右衛門」は天保期の刊行とされる『商家高名録』に「諸国紙類品々　騰雲堂　上田柳町　紙屋藤兵衛」「〈上田嶋白紬〉買次所　綿太物類　信州上田海野町　斎藤曾右衛門」とある上田の商家[13]、「依田見節」は上田藩に仕えた医師である[14]。

以上より、春利が小諸や上田、塩尻など周辺地域の商家や庄屋、武家、修験者などの分蔵する宣長の自筆添削を持つ元克の詠草類を収集し、そこに宣長の評語を自身の推量によって書き加え、さらに歌友たちとの意見交換を経て編纂されていったのが、これらの資料ということになろう。これら宣長遺墨の流通の実態については、本輯所収「萩原元克問・本居宣長答『鈴の屋翁答元克問書写』翻印と解題」で詳論に及んでいる。併せて参照されたい。

『**鈴屋判番歌**』（B1ト318-5 1）は寛政元年中の四度の宣長判の歌合を合写したもので、書写奥書を持たないが白椿山春利の筆と判断される。個々の歌合に関しては、筑摩書房版『本居宣長全集』別巻二・三に収録されているので改めて触れることはしないが、これらの歌合の記録自体、伝本に乏しく、また本書に添えられた伴信友の序文はこれまで未紹介のもののようであるから、以下に翻字しておく。

むかし鈴の屋の翁のをしへこたちのよみ歌をつかひて、判こひまをせるまゝにものしたまへるを、とりあつめて写し伝へたるかあるを見るに、もはらその道の教のためをおもはれたるなるへし。わさとむね〳〵しき歌合といふものゝさためのさまのみにはあらて、その歌主のちからにかなへて、さとしかてらともすればうちとけ、されはみたる詞をさへにましへてものせられつれは、いにしへのよき人たちのうた合の判詞、またおきなのなへてのこゝろいれて書あらはされつるふみともなとゝ、ひとしなみにうけはりてもてはやすへきにはあらさめれと、おのれかことをともからのまなひのためには、またさらにめてたきをしへふみになむありける。さるは村田春門翁の、さきに並樹とて在しころ、書集めおかれつるをかりてうつしもてるに、こたひ紀

伊君の御さふらい長沢伴雄主の此江戸にしたしく来り逢るか、はやく大平翁のとりあつめおかれつる本をうつしもてり、とて若山よりとりよせて見せられたるを、人におほせて書うつさせて、さきなるにあはせて、かく四巻とはなしたるなり。また後にもとめ得たらむには、次々にうつしそへてむ。

天保七年十月廿日　伴信友

右によれば、信友は村田春門が収集した宣長判歌合の写しを所持していたが、そこにさらに本居大平が収集した宣長判歌合を長沢伴雄が写したものを、江戸にて伴雄経由で入手し、写しを作成して、併せて四度としたとのことである。[15] 春利が必ずしも伝本の多くはない同書をどのような経緯で披見・筆写したかは未詳ながら、信友序も含めて一応注目される。

『歌合抄出』（B1ト318-61）は、既に筑摩書房版『本居宣長全集』別巻三に収録される明和七年から九年にかけての宣長判歌合である『鈴屋車中歌合幷判』を抄出したものと判断される。全集解題においては底本である太鼓谷稲成神社本に加え、静岡県立中央図書館葵文庫蔵『飯高社中歌合集』の存在が指摘されている。太鼓谷稲成神社本はまず全てのつがいの歌とその勝敗が列記された後に、宣長の判詞が最後にまとめて記されるが、静岡県立中央図書館葵文庫本は歌ごとに判詞が記される点に体裁上の大きな違いがある。この春利が筆写した『歌合抄出』は体裁上は後者の葵文庫本に近い。いずれにしても従来知られていた二本の伝本に新たに一本を加え得たことになろう。春利の長文の識語は先に全文を掲げたが、「伴ノ信友ノ翁のとりあつめものせられたるを得てうつしもてるに、あはせて五巻とはなしぬ」とあるのは、先述の『鈴屋判番歌』のことを指しているのであろう。

○その他、注目される資料について

『百題』（B1ト318-171）は四季の百韻が記され、個々の句に合点と多数の点印が捺され、評も付されている。句の作者は未詳ながら、奥書に「右／鶏山」とあり、安永二年（一七七三）刊『信濃地名考』の著作で知られる信州佐久郡岩村田宿の俳人・国学者の吉沢好謙（一七一〇～一七七七）が評点を付したもので、新出の俳書かと思われる。好謙は賀茂真淵門の加藤宇万伎に国

学を学んでいたこともあり、先人の著作として春利が本書をたまさか入手したものであろうか。

『百人一首波羅羅能黄葉葉』（B1-ト318-22）は、百人一首の注釈書としては稀覯に属し、これまで上田市立図書館花月文庫に蔵されている一本（整理書名「散々能黄葉」）の存在しか知られていない。本文中に「衣妙屋オモヘラク」などとあることから、著者は衣妙舎と号した水戸出身の国学者、岡庭真垣（生没年未詳）と断じてよい。書名後半は「はららのもみぢば」と訓むのであろう。本書は、たとえば冒頭の天智天皇歌を「金篦田之田穂五十穂乃十間男荒三吾衣服者梅丹沾鶏」といった具合に各歌の本文を真名書で示し、語句を分かち注解を加える体裁をとる。

著者の真垣は文化年間初頭頃には江戸を拠点に本居宣長の門弟と称して国学を講じていた人物らしいのだが、宣長の門人録にそれらしい名は見出せない[16]。ところで、大国隆正（一七九三～一八七一）の著作『学統弁論』（異本）に真垣に関する以下のような興味深い逸話が見える。

そのころ岡庭真垣といふ人ありて本居先生の門人となのりけるにより、わが父家にまねきて歌書をとかしめけり。そのもてなしの相手に平田玄瑞（平田篤胤の医名・引用者注）といふくすしをまねきて侍らせけり。その元瑞と真垣とのものがたりをわが父ききて居られしが、真垣かへりしのちにおのれにさとしていはるるやう、元瑞は尋常の才学にあらず、真垣にはるかにまさりておぼゆるなりといはれしより、おのれそれより平田氏のいへにゆきてものとひしに（以下略）[17]

江戸住であった隆正（当時十五歳）の父で津和野藩士であった今井秀馨は真垣を国学の師として家に招いていたが、ある日、その席に篤胤が同席し、真垣の退去後に父が隆正に語った「元瑞は尋常の才学にあらず、真垣にはるかにまさりておぼゆるなり」との言が契機となって、隆正は文化四年（一八〇七）、篤胤に入門したのだという[18]。真垣はその後、江戸から上州高崎に拠点を移したようで、文政二年（一八一九）には『上毛三碑考』など当地に縁の深い著作を残している[19]。真垣は小諸八幡の名主で、俳人として知られる小林葛古（一七九三～一八八〇）とも交流があったらしく[20]、先に触れた上田市立図書館花月文庫にも本書の伝本が伝わることに鑑みて、活動範囲を上州から信州に

まで広げていたものと思しい。

さて、本書において注意すべきは花月文庫本には一切見えない書入れの存在である。本書に独自に見える斎藤彦麻呂、大国隆正（本書での表記は「今井秀清」）、及び「曾春占」（本草学者の曾占春の誤記であろう）の説の書入れは、真垣の江戸での諸活動の痕跡と捉えられようが、後年になって『学統弁論』で当時を回顧する際の真垣に対するいささか冷淡な物言いからすると、本書に隆正説が見えるのはやや違和感を覚えないではない。しかしこれは、篤胤に師事する以前の隆正が、父とともにある時期まで真垣の百人一首講義などを熱心に受講していた痕跡と見るべきものではなかろうか。また、本書冒頭近くの百人一首の成立について述べた箇所には、

白川少将（松平越中守定信）殿ノ御本トテ古キ時ノ物ト見ルモ有。是モ五十余首ノミ。森伝右衛門、屋代太郎御祐筆トノ、持玉フモ其代ノ物トハオモハシキヲ、是モ百ニハ不足。

とある。定信の本というのは『集古十種』法帖篇の「定家卿真蹟小倉色紙」摸刻のことであろうか。森伝右衛門は森尹祥で、屋代太郎は篤胤とも親しい屋代弘賢のことであるから、どうやら真垣は彼らの所持していた小倉色紙を実見したことがあるようである。

文化初年頃の江戸において、真垣と篤胤が行動をともにするような間柄であったという事実は、従来の篤胤研究においてあまり注目されていないようである。篤胤が本居春庭に正式に入門したのは文化二年のことだが、彼自身もまたそれ以前から宣長門人であると自称していた時期があったことは既に指摘がある[21]。同年三月五日付書状で宣長とは「乍夢師弟之御契約」があったのだ、と篤胤が春庭に対してわざわざ言い立てているのは[22]、自身のかつての門弟自称という振る舞いに対する弁明とも受け止められよう。篤胤と真垣のどちらが先に宣長門人を自称しはじめたのかは不明である。ともかくも、彼らはその活動の初期において近似した軌跡を辿ったが、一方はその後の国学史に大きな足跡を残し、他方はほぼその存在を忘れ去られることとなる[23]。

『浜ちとり』（B1ト318-29 1）は文政から天保期頃に活動が確認できる粕谷重鑑なる人物の自筆の雑記である。右のような序文を持つ。

此一冊は、いにし寅年弥生のころより、ことし巳のしもつきまて、くさ〴〵の書よりかきぬき、又は人々の話を聞たるまゝ、何の考もなくかいつけ、かく表紙さへものして、号なきもと六帖にみえたる歌を思ひて、浜千鳥とせしは、声をたにきけはなくさのはまちとりふるすわすれすつねに問こよ、問かしと思ゆから。

天保四年　　粕谷重鑑

この序文にもある通り、種々の文献からの雑抄、見聞記などを雑多に記したもので、冒頭から「北村季文角田川八景歌並序」「春の紅葉のはしかき」（平田篤胤）「白石先生著述目録」などが続き、古物の模写や拓本、書状の写しなども混じる。いかなる経緯で本書を白梅山春利が入手したかは不明ながら、念のため記しておく。

『源氏物語二葉艸』（B1ト318-57 7）、**『〔源氏物語帚木巻俗語訳草稿〕』**（B1ト318-53 1）、**『〔源氏物語常夏巻俗語訳草稿〕』**（B1ト318-56 2）は、いずれも小諸藩士であった太田道興による源氏物語の俗語訳ならびに注解の自筆稿本である。他に伝本は知られていない。『源氏物語二葉艸』の冒頭に「附ていふ」と題して本書執筆の経緯などが綴られているが、それによれば、今年の二月に妻を亡くし、去年の九月に生まれた幼い娘への教育のために、雨夜の物語を含むこの帚木の巻の俗語訳に取り掛かったのだという。道興は先行する俗語訳書にも言及している。加藤宇万伎『雨夜物語たみことば』は原文に若干の説明を加えるのみで女児には理解しにくく、他方、栗田直政『源氏遠鏡』（若菜巻の俗語訳）はとても平易であるものの、「都がたの俗言にてわが信濃わたりのすゝけたる耳には」なお理解しがたい部分が残るとする。よって本書では理解しやすい雅語も採用しつつ、主に俗語によって、もっぱら子供でも分かりやすい訳を目指したのだと述べている。

本書には、「女はまづ夫をあはれと思ふ心をふかゝらしめて、二心なく夫につかへて操節正しく家を治めるが、この物語のこゝろにぞありける」云々といった近世期の女訓書に典型的な教えも随所に説かれているのだが、最も注目されるのは、道興が本居宣長『源氏物語玉の小櫛』を参照しつつ展開する、いわゆる「物のあはれを知る」説の極めて特異な解釈である。

この物語は玉小櫛にわきまへられたる如く、儒仏の意にときなせるはひがことにて、たゞものゝあはれをふかくしらしめんとてになんありける。かれ思ふに、この物のあはれといふ事をだによくわきまへしらば、ちゞの教へもこれにまさらじかし。君をあはれと思ふ心ふかからば、君のために身をくだき、命をもすて忠義をつくすべく、親をあはれと思ふ心ふかからば、親の心をやすからしめ、切(セツ)に孝養をつくすべく、朋友をあはれと思ふ心ふかくは、信をもてまじはるべく、民百姓をあはれと思ふ心ふかくは、仁恵をかけてもてあつかふべし。このあはれといふ心一つなん、三史五経などのみち〳〵しくこちたき教へにははるゞ〳〵たちまされりける。(24)

道興はまず、宣長説に忠実に、儒教・仏教的な解釈を「ひがごと」として退ける。しかし、彼はすぐさまその論理を反転させはじめる。すなわち、「物のあはれを知る」心のありようは儒教における忠・孝・信・仁の源泉となりうるのだとし、従って「あはれと思ふ心」は「三史五経」の教えを遥かに凌駕する倫理道徳的基盤であると説くのである。宣長が『源氏物語』から取り除こうとした要素を、道興は「あはれと思ふ心」を梃子に再導入しようと試みている。ここでは文学史・思想史的に看過しがたいねじれが生じている。

この宣長の「物のあはれを知る」説の読み替えは、さらに本書が書かれたと思しい安政期前半の対外危機という政治的文脈へと接続されてゆく。

近きころ西洋(ニシノハテ)のむくつけき国々より、ぬす人ら来りて、かしこくも　皇国をうかゞひ奉り、いやなきふるまひなどす□(虫損)□とのゝしるを、　皇国の人たらんもの、たれかこぶしをにぎり髪さかたゝざらん。されば皇国をあはれと思ふ心だにふかゝらんには、貴ときも賤しきも、若きも老(おい)たるも、女も子どもゝ、国のために命をもすてゝ骨をもくだきつへし。（中略）そも〳〵　皇国をあはれと思ふこゝろあさからんには、大砲の山をきづき玉薬の海をたゝへたりとも、なにのかひかはあらん。たゞこのあはれのこころ一つこそ、こよなき国のかためにはありけれ。されば男も女も、高きもひきゝも、このあはれてふ心をふかゝらしめんぞ学ひのみちのもとつ道なりける。もしこの心あさくは、いか

に人めきたらんも、たゞ草木にことならじ。

ここにおいて「あはれと思ふ心」は、個人の内面的情動や、親や主君や友といった具体的な他者への倫理的態度の域を脱し、「皇国をあはれと思ふ心」、すなわち国家という政治的共同体への命がけの献身という、ナショナリズムの基盤にまで肥大化させられている。道興は「あはれと思ふ心」こそが、「大砲」「玉薬」といった武器にもまさる、「こよなき国のかため」すなわち国家防衛の基幹だとまで言ってのける。宣長説を受容しながらも、「あはれと思ふ心」を儒教的徳目の基盤へと読み替え、さらにはそれを幕末期の対外危機の時代に応答した政治的イデオロギーの源泉にまで拡張するこの道興の理路は、一見するとひどく奇矯な説に映るかもしれない。

しかし本書は、伴侶を喪った道興が、遺された幼い娘のために筆を執った書物であったことをここで思い起こす必要があろう。おそらく道興は、極度に不安定なこの時代状況を生き抜くために、彼が必要だと考えた価値観や指針の一切を『源氏物語』と「あはれと思ふ心」に託し、娘に伝えようとしたのではなかろうか。結果としてその議論は、「あはれ」から旧来からの儒教的徳目や時局に応じた攘夷の精神すらも導出するという大きな飛躍を孕んだ（端的に言えばじつに欲張りな）ものとなった。ただ、その根底には迫りくる対外危機と、家庭の不幸という二重の危機に向き合ったひとりの小諸藩士による、娘の将来への切実な慮りという内的な必然性があったであろうことは想像に難くない。むろん、以上のような道興の所説は、『源氏物語』の内在的な読解を目指した宣長の説とは明白に異なり、作品自体の理解に何ら寄与するものではないということは、贅言を要すまい。とはいえ、『源氏物語』ならびに「物のあはれを知る」説の、幕末期におけるひとつの特異な受容のありようとして、やはり注目すべき事例といえるだろう。

なお、『〔源氏物語帚木巻俗語訳草稿〕』は『源氏物語二葉艸』の草案と見られる。また『〔源氏物語常夏巻俗語訳草稿〕』の存在から、道興は帚木巻に続いて常夏巻の俗語訳を試みたようだが、成稿には至らなかった模様である。いずれにも成立時期は明示されていないが、道興は後述するように安政六年（一八五九）に江戸で没していること、常夏巻の訳が未定稿であることから概ね安政期前半頃の成立と考えられる。本雑集にこれらの著作が含まれる理由は未詳ながら、生前に交流があった道興の

遺著を春利が譲り受けたものであろうか。

○白椿山春利の自筆稿本類について

『**しぬびごと**』（B11-318-68 ト1）は先にも触れた通り白椿山春利による追悼文集の自筆稿本である。本書に追悼文が収録されている人物を以下に整理して掲げる。

小林重香　小諸城内の鹿島神社の大宮司を務め、城下の健速神社の職も兼務した神職。春利の和歌の師でもあったようである。号松蔭。安政二年（一八五五）没、六十四歳。本居大平門。先述した賀藤景琴『北帰録』では、景琴が春利から聞いた話題を書き留めた中に「小諸の神職小林真栄（マオキ）なるもの、皇朝学者にて和歌を善くし、平田を尊信して居る由」とある。息重年こと小林市正は安政六年十月七日に平田家に角田忠行の紹介で入門している[25]。村沢武夫『信濃歌道史』（信濃短歌社、一九四八）七一頁に言及あり。

太田道輿　小諸藩士。安政六年（一八五九）、江戸滞在中に病没。享年五十。先に触れた『源氏物語二葉艸』の著者である。賀藤景琴『北帰録』には「小諸藩の太田成三郎、先年、平田を訪ひたる人にて、其の学風を慕ひ居る由。今は改名して甚右衛門と云ひ番頭を勤むと云」との記事がある。

小野光成　上田の大星神社神主。万延二年（一八六一）没、三十歳。もとは佐久郡入沢村大宮神主伴野豊彦の息。

斎藤文子　春利妻。慶應二年（一八六六）没、四十四歳。信濃国佐久郡今岡村斎藤安元女、母は同国同郡大澤村阿部和道女。

樫山敬當　春利父。文久二年（一八六二）没、七十八歳。名は真幸彦とも。本文では「白椿山敬當」と表記。家業の暇には神典を読み、和歌を嗜んだとし、春利に対して「我　天皇は天の下の　大王に大坐坐けり、鈴の屋の大人は天の下の知識人に坐けり。神と人との際をし究てよ」と語っていたという。春利の宣長への傾倒はこの父からの影響があったようである。

牧野成道　小諸藩執政、奸邪のために構死する所となる。明治元年（一八六八）没、三十五歳。

成沢寛経　小縣郡上田原町にて呉服太物類を商った万屋金兵衛の当主にして国学者・歌人。号百合舎。嘉永四年（一八五一）に諏訪下社大祝金刺家の所蔵する『大塔物語』の文正元年（一四六六）堯深筆写本の摸刻を原昌言とともに刊行している。慶應四年（一八六八）没、七十二歳。

同題の『**しぬびごと**』（B1ト318-71-1）は、右よりも後の段階の稿本で、次の三名の追悼文が追加されている。

真木則道　小諸藩士、明治元年、四十二歳没。

高崎教方　小諸藩士、明治元年、四十八歳没。

渡辺房子　春利の後妻（但し縁談が整う前に没した）、明治四年没、享年四十二。小縣郡堀村の池田六助の母。

なお、『しぬびごと』の諸本としては無窮会図書館神習文庫本の存在が知られているが、閲覧停止のため調査の機会を得ない。

『**白椿山春利主五十賀兼題**』（B1ト318-21-1）は慶応元年（一八六五）に開催された春利五十賀の歌会記録である。他に伝本は知られていない。題は「松」「竹」「亀」と長寿を祈るめでたいもので、出詠者のうち章年・龍繁・盛信・春里は未詳、「弁道」は先述した小諸の修験者山田弁道、「重年」は鹿島神社大宮司小林松蔭の息、「道一」は小諸藩士太田道興の息であろう[25]。それぞれの歌に「春六弁五章五里二」などと点数のようなものが付されており、どうやら一から六までの点数を互いの和歌に付け合っていたようで、彼らの和歌修練の実態が垣間見える資料である。同趣の和歌資料に『**三十八番歌合**』（B1ト318-1-1）があるが、白椿山春利と太田道一以外の出詠者については遺憾ながら未詳である。ついでながら『**藤垣内老翁加墨松蔭詠草写**』（B1ト318-27-1）も大平による小林松蔭歌の添削資料で、新出のものと見られる。

○蔵書印「鳩巣堂樫山氏蔵書記」「樫山蔵書」について

最後に本雑集の多くに捺されている蔵書印「鳩巣堂樫山氏蔵書記」「樫山蔵書」の二顆について簡単に触れておこう。この

双方、もしくはどちらかの印が捺された古典籍は、一定数が巷間に出回っているようであり、本稿執筆時点で各種データベースを検索したところ十六点が確認できた[注7]。現存するものの大半は明・劉惟謙他奉勅撰 荻生北渓訓『大明律』三十巻（佛教大学附属図書館蔵）などといった和刻本漢籍であり、和書は医書が一定数含まれるほか、『湖月抄』（武庫川女子大学附属図書館蔵）、『万葉集略解』（立教大学図書館蔵）などの存在が確認でき、少し変わったところでは国立国会図書館の所蔵する西沢一風の浮世草子『今源氏空船』に「鳩巣堂樫山氏蔵書記」の印が捺されていることが確認できる。当該印は概ね春利の時代に捺されたものかと思われるので、春利所用のものとみて間違いないだろうが、現存する彼の旧蔵書中に和刻本漢籍の比重が大きいのは、その内容の性格上、公的機関等での保存・保護がなされやすく、また財産的な価値のある書物であるため、相対的に多く残されたものと考えてよいだろう。大部な和書の現存が確認できるのも概ね同様の理由であろう。本雑集に含まれる書籍はそうしたものとは明白に性格を異にしており、多くは春利個人のごく私的な蔵書類であったと見られる。そうした片々たるものであるからこそ、幕末明治期の信州小諸とその周辺地における国学の史的展開の一斑を如実に物語ってくれる好資料だともいえるだろう。

注

（1）佐藤寅太郎編『信濃人物志』（文正社、一九二二）四九二頁。なお、引用に際して適宜通行の字体に改めた。以下同じ。なお、当該記事を執筆した色部城南こと色部祐二郎（一八五八～一九一〇）は、長野県埴科郡坂瀬下村の豪農で酒造業を営み、のちに長野新聞社に記者として勤務した人物で、佐久間象山の書簡をあつめた『象山書翰集』（有朋堂、一九一一）などの編著がある。昭和十七年頃の出版と目される『色部米作遺稿』（私家版）所収、色部米作「米作の父母」参照。

（2）『しぬびごと』の原文は真字を多用した宣命体とカタカナによる傍訓で表記されているが、引用に際しては、読みやすさを考慮して、真字及びカタカナはすべて平仮名表記に改めた。なお、真字への傍訓は引用に際して省いた。以下同じ。

（3）ちなみに、春利のこの追悼文によれば、文子は宣長著『源氏物語玉の小櫛』を導きの糸としつつ『源氏物語』を愛読していたようで、それに因んで春利は文子の諡号を「紫文子刀

自」としている。

（4）　小山周次編『小諸義塾と木村熊二先生』（木村先生記念碑事務所、一九三六）所収。なお、当該名簿の末尾には「この名簿は諸家の覚からの寄せ集めで、脱漏も多いことと思ふ。女子学習舎の分も含まれてゐる」と注記がある。利貞は「東京」、いそじ・粂次郎は「栃木県小山町　日本無線社宅」と居所が注記されているが、これは本書が刊行された一九三六年頃時点のものであろう。

（5）　佐久教育会藤村研究委員会編『島崎藤村と佐久』（佐久教育会、一九七八）他参照。

（6）　『日本全国商工人名録』（日本全国商工人名録発行所、一八九二）八七三頁。ちなみに、本家である樫山家は春利の父伝兵衛の子伝太郎の代に家産を廃することとなるものの、伝太郎の長男である樫山甫は一高、東大から三井物産を経て極東貿易顧問等を歴任した財界人として知られ、次男樫山純三はアパレル大手のオンワード樫山の創業者、三男樫山欽四郎は早稲田大学教授等を務めたドイツ哲学者である（「私の履歴書　樫山純三」、日本経済新聞社編『私の履歴書　経済人十六』（日本経済新聞社、一九八一、所収、初出は日本経済新聞での一九七六年三月の連載記事）参照）。二〇二五年九月に樫山家の菩提寺である海応院（小諸市新町）において種々掃苔を試みたものの、白椿山家に関わると思しき墓石は発見できなかった。さらに言えば樫山家の墓も戦前に遡るものが一基も見当たらず、恐らく早い段階で一族の墓石が整理されてしまったものかと思われる。

（7）　賀藤景琴「北帰録（三）」（『山小屋』第十九号、朋文堂、一九三三、所収）。

（8）　信濃史料刊行会編『新編信濃史料叢書』第二十巻（信濃史料刊行会、一九七八）。

（9）　平田家の門人録については、『新修平田篤胤全集』別巻（名著出版、一九八一）を参照。

（10）　上高井誌編纂会編『長野県上高井誌　歴史編』（上高井教育会、一九六二）九一四頁。

（11）　『長野県歴史人物大事典』（郷土出版社、一九八九）。先述の賀藤景琴『北帰録』に春利から聞いた話を書き留めた部分に、「上田領塩尻村の原良平と云百姓、今年三十歳位、頗る好事家なりと云。」とあり。

（12）　注1前掲『信濃人物志』五三九頁。

（13）『上田小県誌』第二巻（小県上田教育会、一九六〇）六二四～六二五頁。またカリフォルニア大学バークレー校東亜図書館所蔵の花屋久次郎版を国書データベースにて参照。

（14）宮坂陽「上田藩医と家系」（『上田市医師会史』上田市医師会、一九六九）参照。

（15）白石良夫「宣長判寛政元年歌合（全集未収録）について」（『語文研究』四七号、一九七九）に紹介のある九州大学文学部蔵『四十八番歌合』二種に照らすと、当該論文で「乙本」とされている系統と、収録する歌合が一致するようである。

（16）鈴木淳・岡中正行・中村一基『本居宣長と鈴屋社中』（錦正社、一九八四）掲載の門人録参照。

（17）引用は南啓治「隆正と篤胤―その師弟関係をめぐって―」（『日本文学論及』第三十号、一九七一）の紹介する島根県立図書館蔵『学統弁論』異本による。

（18）注7前掲『新修平田篤胤全集』別巻一五頁。

（19）国立国会図書館蔵『吾園叢書』巻十六所収本参照（請求記号ＸＢ一〇〇Ｇ二-一）。

（20）小諸市誌編纂委員会編纂『小諸市誌』歴史篇三近世史（小諸市教育委員会、一九九一）八五六頁。

（21）三木正太郎「平田篤胤の鈴屋入門の時期について」（『皇學館論叢』第一巻第四号、一九六八）は、文化元年の時点ですでに篤胤が鈴木服を「同門」と呼んでいる事実などから、享和三年から文化初年にかけて篤胤が宣長門を自称していた可能性を指摘する。

（22）注21前掲三木正太郎「平田篤胤の鈴屋入門の時期について」の紹介による。

（23）拙稿「羽倉風のゆくえ」（『朱』第五十五号、二〇一二）で取り上げた、国学者山口志道（一七六五～一八四二）の師で、「稲荷古伝」なるものの継承者として荷田春満や荷田蒼生子とのつながりを強く打ち出しつつ、化政期に諸国を行脚して独自の言霊講釈を行っていた羽倉訓之のように、著名な国学者との師弟関係を虚偽や誇張を絡めて喧伝しつつ国学を講じ、身過ぎ世過ぎとしていた人物が化政期の江戸に複数確認できるのは、ある種の同時代的な現象として捉えるべきものなのかも知れない。なお、真垣に関しては『本多夏彦著作集』第一巻（本多夏彦著作刊行会、一九七二）所収「木部白満と三碑考」に若干の関係資料の紹介があり、それによれば、文化十三年の時点で真垣の門弟には下野国都賀郡栃木新田の

名主猪瀬善助及び同国足利郡足利本朝天王の神主赤坂主水がいたこと、上野国吾妻郡大戸村の豪農加部安左衛門家に滞在していたことなどの事実が指摘されている。

(24) 『源氏物語二葉艸』の本文は推敲の跡が夥しいが、引用に際しては推敲後の形で翻字した。以下同。

(25) 注7前掲『新修平田篤胤全集』別巻五九頁。

(26) 注7前掲『新修平田篤胤全集』別巻三七二頁に見える慶應年四月二日に平田家に入門した「太田宇忠太」は道一のことである。

(27) CiNii books、国会図書館デジタルコレクション、国書データベース、早稲田大学古典籍総合データベースでの検索結果を参照した。

目録

〈凡例〉本目録の記述事項は以下の通りである。第一行に書名・巻数（不分巻は記載せず）ならびに存巻状況・作成地（和唐韓）の別および書型・請求番号（末尾の数字は員数を示す）、第二行に編著者・成立年時・刊写の別および刊写者、第三行以降に特記事項・蔵書印・書入等。

○　総記

浜ちとり（外題）　和大　B1 ト318-29 1

粕谷重鑑編

天保四年（一八三三）写（〔自筆〕）

天保四年自序。

〔諸書抜粋〕　和大　B1 ト318-11 1

〔白梼山春利〕編　〔江戸末期〕写（〔自筆〕）

本居宣長『古事記伝』・平田篤胤『宮比神御傳記』・宣長『地名字音転用例』・村田春海『仮名大意抄』・賀茂真淵『万葉考別記』・宣長『詞通路』の抜書。印記「樫山蔵書」「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

教義新聞第五号　和大　B1 ト318-40 1

闕名撰　〔明治期〕写（一筆）

冒頭「京都府ヨリ教部省ヘ伺書ニ曰ク」

東京日々新聞〔抜書〕

闕名撰　〔明治初期〕写（一筆）　和大　B1 ト318-49 1

第四六四号明治六年八月二十六日の散髪に関する記事の抜書。

探報記者十箇條

〔徳富〕蘇峰撰　明治四十二年（一九〇九）五月序刊（〔私家版〕）　和縦長　B1 ト318-16 1

巻頭に「製本壹百部限是爲第八十五（上三字墨書）號」とあり。

一　哲学

〔聖人論〕

〔沼田順義〕（三芳野）撰　〔江戸末期〕写（白椿山春利）　和大　B1 ト318-9 1

白椿山春利書入。奥書「卯月　三芳野／加川桃園殿」。

〔闕名書跋文草稿〕

白椿山春利撰　慶應三年（一八六七）三月写（自筆）　和大　B1 ト318-48 1

奥書「慶應三年三月　白椿山春利（貼紙「慶應三年三月信濃国佐久郡小諸里（上一字見消ち）人白椿山春利謹書」）」

〔序跋集〕

須賀直見等撰　〔江戸末明治期〕写（一筆）　和大　B1 ト318-69 1

字音仮字用格序（須賀直見撰）・神字日文伝序（屋代弘賢撰）・古易大象経伝序（〔平田篤胤〕撰）・大扶桑国考跋（生田万撰）・春秋命暦序考自叙（平田篤胤撰）・春秋命暦序考抜書・正気歌（藤田東湖撰）・五徳説（平田篤胤撰）・八家論（〔平田篤胤〕撰）から成る。

鈴の屋翁答元克問書写（外題）

和大　B1 ト318-14 1

〔萩原〕元克問　〔本居宣長〕答　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

識語「右成沢氏蔵」「右者岩村田笹屋銀吾売物片時借請書写之間催促ニ付及不写竟返却残念残念」「右石井氏蔵」「原昌言蔵」「右石井氏蔵」。

水草の上の物語

和大　B1 ト318-61 1

〔本居宣長〕撰　闕名注　〔江戸末期〕写（一筆）

双行割注あり。手枕（B1 ト318-62 1）と同筆。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

〔勝五郎〕再生記聞

和大　B1 ト318-65 1

〔平田〕篤胤撰　〔江戸末明治期〕写（〔白梅山春利〕）

識語「此次に江戸小石川戸崎町なる石工丑之助がその本居氷川大神の恩頼を蒙れる事どもを記し給へれど其は玉だすき産土神を拝む詞の條に載られたれば已ひそかに此にはもらしつ　門人角田忠行」。

仙童寅吉物語 存巻一

和大　B1 ト318-66 1

平田篤胤撰　〔江戸末明治期〕写（〔白梅山春利〕）

童蒙入学門
〔平田篤胤〕（大壑）撰
〔江戸末明治期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-70 1

〔古学二千文訓〕
〔生田万〕撰
〔明治期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-38 1

〔老子注解〕
闕名編
〔明治期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-37 2

〔三条教則注解〕
〔白梼山春利〕撰
〔明治初期〕写（〔自筆〕）
和大
B1 ト318-67 1

草稿一葉附帯。

〔三条教則注解草案零葉〕
闕名撰
〔明治期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-42 2

未装の草案二葉。

うばごゝろ
山本信有撰
〔江戸末期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-7 1

外題「姥心」。表紙墨書「天国山立龍□登」。

豫美考證
〔矢野〕（平）玄道撰
〔明治期〕写（一筆）
和大
B1 ト318-32 1

罫紙使用。明治三年七月平玄道本奥書。

龍田風神祭・山城風土記・〔古事記伝抜書〕・〔古道論稿本〕　和大　B1 ト318-46 1

闕名撰　〔明治初期〕写（〔白梼山春利〕）

〔古道論稿本〕は白梼山春利撰か。

産土子調之事　和大　B1 ト318-43 1

闕名撰　〔明治期〕写（白梼山春利）

巻末に白梼山春利による産土子に関する文章草案書付あり。

シヤグジといふ祠に坐す神の事　和大　B1 ト318-60 1

白梼山春利撰　〔明治六年（一八七三）〕写（〔自筆〕）

表紙墨書「白梼山春利謹白」。明治六年三月十一日付稲垣重為宛白梼山春利書状の草案ならびに稲垣重為が白梼山春利に宛てたと思しき書状附帯。

水戸公自葬論書　和大　B1 ト318-41 1

永井政助・井坂五郎次郎撰　〔江戸末明治初期〕写（一筆）

奥書「辰五月廿三日　永井改助　井坂五郎次郎」。巻末に「自葬祭葬詞」「祭文」を収める。東北大学図書館狩野文庫蔵『自葬祭書』と概ね同内容。

〔神教要旨略解〕　和大　B1 ト318-39 1

近衛忠房撰　千家尊福撰　〔明治期〕写（一筆）

外題「神教要旨大意」。巻頭に「峡中新聞第六號附録　明治六年第一月」とあり。

二　歴史

〔新野問答〕　和大　B1 ト318-73 1

〔新井白石〕問　〔野宮定基〕答　〔江戸後期〕写（一筆）

外題「官職問答」。印記「小諸文庫」「安政五戊午」他三顆。

古事記 三巻　和大　B1 ト318-72 3

本居宣長訓　〔明治初期〕写

享和三年刊本の写し。外題「古誌傳」。内表紙題「〈訓／正〉古訓古事記」。裏表紙墨書「持主　小山氏（印記「勝□」）真」。

和宮様御発輿之節御詠　和大　B1 ト318-52 1

闕名撰　〔江戸末期〕写（〔白椿山春利〕）

慶長十五庚戌年仙石家小諸城高辻書（外題）　和大　B1 ト318-10 1

闕名撰　〔江戸末期〕写（一筆）

慶安元年・元禄十六年・延享年中の高辻改を合写。文安三年以降の諏訪神社上社の御射山祭に関して記した「〔諏訪御符礼之古書〕」（『信濃史料叢書』第三巻所収）を抄出した一綴（末尾近くに「南畝所持之本珍本／三河物語」と墨書あり）を挟む。

須坂風聞　和大　B1 ト318-45 1

闕名撰　〔江戸末期〕写（一筆）

文久元年（一八六一）に襲封した須坂藩主堀直虎による藩政改革の一環として行われた処罰者及び処罰理由等をまとめたもの。

三　社会科学

文久三亥年五月十二日発尾州津島根高村津田三輪助文通之写　和大　B1 ト318-35 1

津田〔穂積〕（三輪助）撰　〔江戸末明治初期〕写（一筆）

四　自然科学

本草和名部類　和大　B1 ト318-3 1

闕名撰　〔江戸末期〕写（一筆）

『本草和名』を五十音順に部類せしもの。

七　芸術

古歌十首（外題）　和大　B1 ト318-31 1

闕名撰　〔明治期〕写（玉仙）

奥書「玉仙女史書」。

〔絵本太功記断簡〕　和大　B1 ト318-34 1

〔近松柳〕他撰　〔江戸末明治初期〕写（一筆）

書き損じ一紙附帯。

舞附　和大　B1 ト318-59 1

闕名撰　〔江戸末明治初期〕写（一筆）

表紙墨書「福田源兵衛」。

八　言語

古史本辞経 四巻　和大　B1 ト318-15 4

〔平田〕篤胤撰　〔平田〕銕胤・〔平田〕延胤校　明治四年（一八七一）九月写（小山勝真）

奥書「明治四とせといふ年九月九日（印記「勝□」）真」。識語「小山勝真謹書（印記「勝□」真）」。

〔神字日文伝抜書〕　和大　B1 ト318-36 1

〔平田篤胤〕撰　〔江戸末明治初期〕写（〔白梼山春利〕）

〔神字日文伝抜書〕　和大　B1 ト318-47 1

〔平田篤胤〕撰　〔江戸末明治初期〕写（〔白梼山春利〕）

奥書「白梼山氏」。

日本書紀仮字類聚抄　和大　B1 ト318-64 1

〔小野〕（平）高潔撰　〔江戸末明治期〕写（一筆）

かなづかひ雑記（外題）　和大　B1 ト318-51 1

〔白梅山春利〕撰　〔江戸末期〕写（自筆）

無記名序あり。

玉あられ　和大　B1 ト318-13 1

本居宣長撰　文政十二年（一八二九）八月写（太田道興）

〔白梅山春利〕筆和歌詠草一葉を挟む。奥書「文政十二年中秋写畢／太田道興／音たてしなこりはいまも玉あられやまとしまねのつちゆするまで」。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

〔消息文例抜書〕　和大　B1 ト318-54 1

〔藤井高尚〕撰　〔江戸末期〕写（一筆）

九　文学

稲掛大平におくるふみ　和大　B1 ト318-8 1

〔村田〕（平）春海撰　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

外題「平春海稲掛大平におくれる文の写」

厚顔抄（外題）三巻　日本紀倭歌略註（内題）　和大

〔契沖〕撰　天明七年（一七八七）二月写（華山居真弓）　B1 ト318-63 3

奥書「天明七丁未春二月　華山居真弓写」。印記「澗水鶴蔵書印」「樫山蔵書」。

万葉集古調（序）　和半

〔白梅山春利〕撰　〔江戸末明治初期〕写（〔自筆〕）　B1 ト318-23 1

自筆稿本　朱筆添削あり（本文と別筆）。

百人一首波羅羅能黄葉葉　和大

〔岡庭真垣〕（衣妙屋）撰　〔江戸後期〕写（一筆）　B1 ト318-22 2

文化十三年自序。斎藤彦麻呂・今井秀清（大国隆正）・曽春占説書入（本文とは別筆）。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」「樫山蔵書」。

菅家和歌集　和大

闕名撰　〔江戸末期〕写（高梨胤三）　B1 ト318-44 1

外題「聖廟御詠歌」。統一書名〔菅家御詠集〕。奥書「菅家御詠歌以北野宝蔵之本書写之／長享三年己酉正月初四日／右筆慈金〈五拾六歳〉」「（和歌省略）／文化元年甲子暮秋日写之／片桐源栄／（和歌省略）」「文化七年午仲夏写之／老衰其上短筆恥入候得とも強て御懇望ニ付写差遣申候／内村郷高梨村鹿教舎高梨胤三〈七十五歳書〉／小諸本町／鳩屋亀四郎様」。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

三十八番歌合（外題）　和大　B1 ト318-1 1

直道・侭教・経直・昌盛・〔太田〕道一・春里・山道・知明・〔白梅山〕春利詠　闕名判　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

鈴屋判番歌（外題）　和大　B1 ト318-5 1

甫州・潭龍・湛静等詠　〔本居宣長〕（鈴屋翁）判　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

「四十八番歌合（寛政元年仲秋）」「三十三番歌合（寛政元年九月十三夜）」「三十六番歌合（寛政元年十一月）」「二十七番詞合（寛政元年十二月十七日）」から成る。天保七年（一八三六）一〇月伴信友序。印記「樫山蔵書」「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

歌合抄出　和大　B1 ト318-6 1

〔須賀〕直見・戒言・〔村坂〕高行・〔稲掛〕棟隆等詠　〔本居宣長〕判　弘化三年（一八四六）三月写（白梅山春利）

外題「鈴の屋判番歌抄出」「鈴の屋歌合抄出」。弘化三年（一八四六）三月白梅山春利巻頭識語。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記。識語「白梅山春利」。

白梅山春利主五十賀兼題　和大　B1 ト318-21 1

章年・龍繁・盛信・春里・〔太田〕道一・〔山田〕弁道・〔小林〕重年詠　〔江戸末期〕写（一筆）

詠草（外題）　和大　B1 ト318-19 1

〔白梅山春利〕撰　〔江戸末期〕写（〔自筆〕）

「前田のぬし」（前田夏蔭か）の雑記・『誠虚雑記』に寄せた序文（弘化四年十二月五日の年記あり）の草稿・「感花」

「盛花」題での和歌（本文とは別筆の主筆で添削・歌評あり）から成る。

県居翁家集

和大

〔賀茂真淵〕撰　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

B1 ト318-20 1

村田春海編『賀茂翁家集』の抄出。

鈴の屋翁批評萩原元克詠草写（外題）

和大

萩原元克詠　〔本居宣長〕添削　白梅山春利編　嘉永六年（一八五三）三月写（白梅山春利）

B1 ト318-24 1

嘉永六年（一八五三）三月春利序。草稿本。〔小林〕松蔭・〔成沢〕寛経・太田〔道一〕評書入。表紙墨書「春利」。

〔本居宣長添削萩原元克和歌詠草集〕

和大

萩原元克詠　〔本居宣長〕添削　白梅山春利編　嘉永六年（一八五三）三月写（白梅山春利）

B1 ト318-28 2

嘉永六年（一八五三）三月春利序。清書本。〔小林〕松蔭・〔成沢〕寛経・太田道一・太田道興評書入。

鈴屋翁加筆萩原元克詠草写（外題）

和大

萩原元克詠　〔本居宣長〕添削　白梅山春利編　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

B1 ト318-25 1

〔小林〕松蔭評書入。龍繁の長歌草案一葉附帯。

鈴の屋翁批評萩原元克詠草写 次（外題）

和大

萩原元克詠　〔本居宣長〕添削　白梅山春利編　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

B1 ト318-26 1

太田道一説書入。表紙墨書「続」「原昌言蔵」。

藤垣内老翁加墨松蔭詠草写（外題）　和大　B1 ト318-27 1

小林松蔭撰　〔本居大平〕添削　〔江戸末期〕写（〔白梼山春利〕）

表紙紙背に白梼山春利編宣長加評萩原元克詠草類の草稿あり。奥書「右之ひが事とも何分御恵被成下後信に御評文と共に御さとし可被成下候あなかしこ／小林松蔭」。

春雪歌百首　和大　B1 ト318-58 1

闕名撰　〔江戸末期〕写（一筆）

表紙に国語の動詞活用に関する考証を記した一紙貼付。印記「樫山蔵書」。

百題（題箋）　和枡　B1 ト318-17 1

闕名詠　鶏山評　〔江戸中期〕写（二筆）

列帖装。句評・点印・合点あり。奥書「右／鶏山／（印文未詳二顆）水鳥の羽音をふるふ寒さかな」。識語「林士憲（印文未詳一顆）」。評は鶏山（吉沢好謙）筆か。

源語秘訣抄　和大　B1 ト318-30 1

〔一条兼良〕（後成恩寺）撰　〔篠崎〕東海校　〔江戸末期〕写（一筆）

〔篠崎〕東海書入を有する延宝八年（一六八〇）刊本の写し。識語「享保十二年四月十三日　東海平維章校定」。

源氏物語二葉艸　和大　B1 ト318-57 7

太田道興撰　〔江戸末期〕写（〔自筆〕）

源氏物語帚木巻の俗語訳と注釈。「附ていふ」と題した凡例あり。主として湖月抄及び玉の小櫛に依拠。『万葉集略解』

抄出二葉（〔白梅山春利〕筆）附帯。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

〔源氏物語帚木巻俗語訳草稿〕　和大　B1 ト318-53 1

〔太田道興〕撰　〔江戸末期〕写（〔自筆〕）

〔源氏物語常夏巻俗語訳草稿〕　和大　B1 ト318-56 2

〔太田道興〕撰　〔江戸末期〕写（〔自筆〕）

常夏の巻冒頭より「御方々に数まへしろしめされむことをなむ寝ても覚めても」までの俗語訳。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

手枕　和大　B1 ト318-62 1

本居宣長撰　〔江戸末明治期〕写（一筆）

水草の上の物語（B1 ト318-61 1）と同筆。

をはなかもと　和大　B1 ト318-12 1

本居宣長撰　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

玉がつま　和大　B1 ト318-2 1

〔本居宣長〕撰　〔江戸末期〕写（〔白梅山春利〕）

版本抄出。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

〔玉がつま抜書〕　和大　B1 ト318-33 1

〔本居宣長〕撰　〔江戸末期〕写（一筆）

末尾に「橘守部花かつみの考」の抄出あり。

信濃漫録抜書　和大　B1 ト318-55 1

荒木田久老撰　〔江戸末期〕写（一筆）

橘守部説書入移写。印記「鳩巣堂樫山氏蔵書記」「樫山蔵書」。

中そらのにき（外題）　和大　B1 ト318-4 1

〔香川〕景樹撰　〔江戸末期〕写（〔白椿山春利〕）

版本写し。印記「樫山蔵書」「鳩巣堂樫山氏蔵書記」。

阿我多為婦美（外題）　和半　B1 ト318-18 1

賀茂真淵撰　天明三年（一七八三）一月写（美柚夫）

奥書「天明三年歳在癸卯正月／於卯華窓下陳人美柚夫写（印文不詳二顆あり）」。印記「信□字曰子恭」「澗水鶴蔵書印」「鳩巣堂之蔵」。

しぬびごと　和大　B1 ト318-68 1

白椿山春利撰　〔明治初期〕写（〔自筆〕）

自序。安政二年～明治元年の追悼和文集の初稿。

しぬびごと　和大　B1 ト318-71 1

白椿山春利撰　〔明治初期〕写（〔自筆〕）

自序。安政二年～明治四年の追悼和文集の第二稿。

〔しぬびごと関係草案類〕　　和半　　B1 ト318-50 9

白椿山春利撰　小山志免撰　〔明治末期〕写

断簡六葉。『しぬびごと』白椿山春利序並びに「志奴毘言之根賀比文」と題した明治四十二年九月付の村松清陰宛小山志免書状の写しとその草案三種等から成る。

【附記】本研究は JSPS 科研費 23K25300 の助成を受けたものである。